

思いやり目標は異論・批判の表明を促すか

新谷, 優 / NIIYA, Yu

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

科学研究費助成事業 研究成果報告書

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

6

(発行年 / Year)

2019-06-04

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月4日現在

機関番号：32675

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K17254

研究課題名(和文) 思いやり目標は異論・批判の表明を促すか

研究課題名(英文) Do compassionate goals predict greater expression of dissent?

研究代表者

新谷 優 (Niya, Yu)

法政大学・グローバル教養学部・教授

研究者番号：20511281

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、思いやり目標(他者のためになることをしようとする)は異論や批判の表明を促し、自己イメージ目標(他者にいい人だと思われようとする)はそのような行動を抑制することを明らかにした。英語版尺度を改訂し、日本で妥当性と信頼性のある尺度を開発した上で、日米で調査を実施した。思いやり目標の高い人ほど異論の表明は集団にとって有益であると感じ、より頻繁・明確に異論を表明する一方、他者に「いい人」であることを印象づけたいと思う傾向のある人や、他者に悪い印象を与えたくないと思う傾向のある人ほど、異論の表明の頻度が少なく、表明する時も個人の意見であることを隠す傾向が強いことが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

自己イメージ目標(他者にいい人だと思われようとする)と思いやり目標(他者のためになることをしようとする)には強い正の相関があり、どちらも向社会的行動を予測することが言われてきたが、本研究はこれら対人目標が相反する行動を予測することを明らかにし、異なった動機であることを明示した点が学術的に意義深い。また、自己イメージ目標を抑制し、思いやり目標を助長することで各自が異論を表明しやすくなれば、組織内の不正を阻止する、安全神話が偽りである可能性を指摘する、他者の気づいていない間違いを指摘するなどして、個人および集団のパフォーマンスの向上、および事故や犯罪の防止に役立てられる。

研究成果の概要(英文)：This research found that compassionate goals to support others' well-being predict greater expression of dissent toward an ingroup whereas self-image goals to project a positive image of the self predict a reduced tendency to express dissent among Japanese and Americans. Surveys in Japan and the U.S. found that people who are higher on compassionate goals perceive the dissent to be beneficial to their group, which in turn predicts greater frequency and clarity in dissent expression. In contrast, those higher on likable self-image goals or avoidant self-image goals are less likely to express dissent and are more likely to avoid taking ownership of their opinions. Although compassionate and self-image goals both reflect a prosocial approach to relationships, this research demonstrates that they can each predict different behaviors and that these goals reflect fundamentally distinct motives.

研究分野：社会心理学

キーワード：思いやり 批判 異論 同調 文化 日本 アメリカ

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

人の間違いを指摘したり、集団思考に陥っているグループに対して反対意見を述べることは他者に嫌われるリスクが高く、人のためになるとわかっているにもかかわらず自分の意見を表しにくい。特に日本人は欧米人と比べ、他者に異論を唱えたり、他者の間違いを指摘しない傾向がある(山本, 1983)。批判や異論の表明を促す要因として、本研究では個人の意思でコントロール可能な「個人の対人関係における目標」に着目した。人が対人場面において目指すこととして、他者に良い印象を与え、その印象を維持・促進しようとする目標(自己イメージ目標)と、他者の幸福を高めようとする目標(思いやり目標)がある(Crocker & Canevello, 2008)。アメリカの大学生を対象にした縦断的調査では、思いやり目標の強い人ほど、他者のニーズに敏感に対応し、良好な対人関係を築くのに対し、自己イメージ目標の強い人は自己のニーズ(自己の評判を維持すること)を優先させるため、皮肉にも対人関係を悪化させることが指摘されていた(Crocker & Canevello, 2010)。これらの結果から、思いやり目標の強い人ほど、異論や批判は他者のためになると考える傾向があり、異論を口にすることができる一方、自己イメージ目標の強い人ほど、異論や批判を他者に嫌われるリスクとして捉える傾向があり、異論を表明しにくいという仮説を立て、これを検討した。

2. 研究の目的

(1) 日本で妥当性・信頼性のある思いやり目標と自己イメージ目標尺度の開発

アメリカで開発された思いやり目標・自己イメージ目標尺度(Niiya, Crocker, & Mischkowski, 2013)は、日本文化における好ましい自己イメージを的確に反映していない可能性があり、また信頼性も低いという問題があった。そのため、本研究では、日本文化に適した項目を追加し、日本において信頼性および妥当性の高い尺度を開発した。

(2) 思いやり目標と自己イメージ目標の実験操作の確立

本研究の第二の目的は、対人目標が異論の表明を促進・阻害するかの因果関係を調べるために、思いやり目標と自己イメージ目標を実験操作で高める方法を確立することである。

(3) 思いやり目標と自己イメージ目標と異論の表明の関係性を明らかにすること

思いやり目標と自己イメージ目標と異論の表明の関係性を調査および実験で明らかにすることが本研究の第三の目的である。しかし後述するように、対人目標を実験的に操作する方法が見つからず、個人差としての対人目標と異論の表明の関係を調査で調べることにとどまった。

(4) 思いやり目標と非ゼロサム思考の関係について明らかにすること

批判や異論の表明を行うには、それが自分のためにも他者のためにもなるという非ゼロサムの考え方をし、ストレスを抑制する必要があることから、思いやり目標とこれらの変数の関連を明らかにすることを第四の目的とした。

3. 研究の方法

(1) 尺度の開発のために、日本人成人を対象にしたウェブ調査を三回実施した。研究1の調査では20代から60代までの成人442名に、アメリカで開発された思いやり目標・自己イメージ目標尺度を翻訳した尺度(Niiya, Crocker, & Mischkowski, 2013)に、新たに思いやり目標と自己イメージ目標の項目を10個ずつを加えた尺度に回答してもらった。また、相互独立的・協調的自己観(高田, 2000)や成長追求(Dykman, 1998)、ゼロサム思考(Crocker & Canevello, 2008)との相関も調べた。研究2の調査では、日本人成人364名に改訂版の思いやり目標と自己イメージ目標尺度に加え、社会的望ましさ(谷, 2008)、利得接近志向・損失回避志向(尾崎・唐沢, 2011)、セルフ・コンパッション(宮川・新谷・谷口・森下, 2015)の尺度に回答しても

らった。研究3の調査では、二回目の調査の回答者に対し、二週間後に再テストを行い、尺度の安定性を確認した。また、公的・私的自己意識(菅原, 1984)と愛着スタイル(中尾・加藤, 2004)との相関も調べた。

(2) 実験1では、63名の大学生を(1)自分が恵まれていると感じたときのことを書かせる思いやり目標群、(2)自分が周りの人からどのような人だと思われたいと思うのかについて書かせる自己イメージ目標群、(3)前日の主な活動について記述させる統制群にランダムに振り分け、作文課題の後、改訂版思いやり目標・自己イメージ目標尺度に回答させた。実験2では、大学生47名を対象に Kao, Su, Crocker, & Chang (2016)の方法を応用した実験を実施した。実験室に来る前に改訂版思いやり目標・自己イメージ目標尺度に回答してもらった上で、実験室ではランダムに思いやり目標に関連する価値観(共感・思いやりがあること、自分のためだけでなく、社会全体のことを思って貢献すること、など)または自己イメージ目標に関連する価値観(人気・賞賛・名声、自信・能力があるように見えること、など)について、それがなぜ自分にとって大事なのかを記述させ、「今現在の」対人目標について回答させた。

(3) 研究1では、日本人成人を対象にウェブ上で対人目標尺度に回答してもらい、その二週間後、499名に対し、「自分にとって重要な集団」または「あまり重要でない集団」に対して意見の不一致があった状況について、異論を表明した頻度とその理由について尋ねた。研究2では同様の調査で重要な集団に対して異論の表明をしたことがあると回答した389名に対し、表明の頻度と表明の理由に加え、どのように異論を表明したかについて尋ねた。さらに研究3では、Packer & Chasteen (2010)の方法を応用し、大学生94名を実験室に呼び、思いやり目標の高い人ほど、実際の行動として異論の表明を行うかを測定した。研究4は日本人354名とアメリカ人378名にウェブ上で対人目標尺度に回答してもらい、重要な集団に対して異論があったと回答した者に、表明の頻度と理由、方法について尋ねた。研究5では、アメリカ人大学生240名の対人目標を測定した上で、実験室にて意見の異なる他の大学生3名(サクラ)とのディスカッションでどの程度、自分の意見を表明するかを測定した。

(4) 日本人成人1775名にウェブ上で対人目標尺度、および時間をゼロサム資源として捉えている度合いを測定する尺度(Niiya, 2018)に回答してもらった。そのうち603名には二週間後に心理的欲求充足尺度(Deci & Ryan, 2000; 大久保, 長沼, 青柳, 2003)、主観的幸福感尺度(伊藤・相良・池田・川浦, 2003)、PHRFストレス尺度(今津ら, 2006)、ゆとり感尺度(古川・山下・八木, 1993)、Time Affluence Scale(Kasser & Sheldon, 2009)、客観的な忙しさ(Sheldon, Cummins, & Kamble, 2010)の項目に回答してもらった。

4. 研究成果

(1) 研究1ではNiiya et al. (2013)で用いた8項目と新規に追加した10項目を合わせて探索的因子分析にかけ、因子負荷量に問題のあった6項目を削除したところ、残った思いやり目標11項目と自己イメージ目標11項目はそれぞれの因子にきれいに分かれた(表1参照)。確認的因子分析においても、因子間の相関を想定したモデルの適合度は十分あり、一因子モデルや接近項目と回避項目を分けた二因子モデルの適合度よりも高かった。研究2の確認的因子分析でも同様の結果が得られた。信頼性係数も研究1~3を通して、思いやり目標(.90~.92)、自己イメージ目標(.91~.93)ともに高かった。研究3ではさらに、再テストの信頼性係数を求めたところ、.61~.64の中程度の相関が得られ、対人目標には安定した個人差としての側面と状態的な側面があることが確認できた。関連変数との相偏相関を表2に示す。思いやり目標は成長追求・相互独立的自己観・セルフコンパッションと正の関連があり、ゼロサム思考・評価追求・

不安型と回避型愛着スタイルと負の関連がある。一方、自己イメージ目標は評価追求と相互協調的自己観・不安型と回避型愛着スタイルと正の関連があった。利得接近志向と損失回避志向は両方の対人目標と同程度の正の関連があり、公的自己意識は自己イメージ目標とより強い関連があり、私的自己意識は思いやり目標とより強い関連があった。以上の結果から、改訂版思いやり目標・自己イメージ目標尺度の妥当性・信頼性は確認できたと言える。

表1 思いやり目標と自己イメージ目標尺度の因子分析の結果

項目内容	サンプル1		サンプル2	
	因子負荷量			<i>h</i> ²
	1	2	<i>h</i> ²	
気が利く人だと思われるようにする(+)	.95	-.10	.80	.78
親切な人だと思われるようにする(+)	.87	-.04	.72	.83
自分の良いところを相手に気がついてもらえるようにする ^a (+)	.87	-.10	.66	.83
気配りのできる人だと思われるようにする(+)	.87	-.02	.74	.80
頼りがいのある人だと思われるようにする(+)	.84	-.01	.70	.77
自分を好きになってもらう ^a (+)	.75	.08	.64	.80
自分が正しいことを相手に認めてもらう ^a (+)	.72	.03	.55	.75
一目おかれる存在になる(+)	.64	-.02	.39	.64
怠け者だと思われないようにする(-)	.60	.17	.51	.73
相手に嫌われないようにする(-)	.58	.20	.51	.67
恥をかくことを避ける(-)	.49	-.01	.24	.63
人の立場に立って考える(+)	-.11	.86	.64	.50
人の気持ちをよく考える(+)	.10	.78	.71	.80
助言をするときには、その人のためになるようよく考える ^a (+)	-.01	.77	.58	.77
人が困るようなことをしないようにする(-)	-.06	.70	.45	.65
相手が傷つくようなことを避ける ^a (-)	-.07	.67	.39	.60
人の役に立つ(+)	.13	.63	.52	.66
自分の考えを押し付けない(-)	-.07	.62	.34	.59
人の成長の機会を奪わないようにする(-)	.15	.59	.47	.61
人と真摯に向き合う(+)	.19	.55	.47	.72
先入観にとらわれない(-)	.06	.50	.29	.54
早合点しないようにする(-)	-.03	.49	.22	.64

注) + は接近項目, -は回避項目。^aは Niiya, Crocker, & Mischkowski (2013) の 8 項目版尺度に含まれていた項目。

表2 日本人成人サンプルにおける自己イメージ目標と思いやり目標と関連変数との偏相関

	自己イメージ 目標	思いやり 目標
研究1		
ゼロサム思考	-.03	-.59***
評価追求	.70***	-.15**
成長追求	-.03	.63***
相互独立的自己観	.05	.38***
相互協調的自己観	.59***	-.02
研究2		
セルフ・コンパッション	-.03	.16**
利得接近志向	.26***	.31***
損失回避志向	.19**	.32***
研究3		
公的自意識	.60***	.17***
私的自意識	.25***	.49***
親密性の回避	.19**	-.25***
見捨てられ不安	.36***	-.14*

注) 研究1では性別と世代を統制した上で、自己イメージ目標と思いやり目標を同時に回帰分析に投入した。研究2では性別、年齢、社会的望ましさを統制した上で、自己イメージ目標と思いやり目標を同時に回帰分析に投入した。

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$.

(2) 研究1では、恩恵について記述させることで思いやり目標が高まり、周囲の人に与えたい印象について記述させると自己イメージ目標が高まると予測していたが、両群とも統制群に比べ、どちらの対人目標においても有意な差は見られなかった。そこで研究2では、介入の前後で対人目標を測定し、思いやり目標に関する価値観、または自己イメージ目標に関する価値観について記述後、「今現在」の対人目標を測定し、群間および群内の比較を行った。しかし、思いやり目標はどちらの群においても介入の前後で同様に上昇しており、また自己イメージ目標に関しては、思いやり目標に関する記述を行った群の方が自己イメージ目標の記述を行った群よりも上昇する傾向が見られた。これらの結果から、簡単な実験操作では一時的に対人目標を高めるのは難しいことがわかった。対人目標の因果関係を示すには実験操作を確立しなければならないが、本研究では有効な実験操作が見つかるまで、調査にて仮説の検証を進めることとした。

(3) 研究1では仮説どおり、思いやり目標をもつ人ほど異論の表明は集団のためになると考える傾向が強く、より頻繁に異論を表明する一方、自己イメージ目標をもつ人ほど、異論の表明の頻度が少なくなることが明らかになった。上記の傾向は重要な集団に対して見られたが、重要でない集団に関しては、対人目標は異論の表明を予測しなかった。研究2では、さらに思いやり目標をもつ人ほど、よりはっきり、かつ相手が受け入れやすいように異論を表明するのに対し、自己イメージ目標をもつ人ほど、異論の表明は自己のためにするものと考えられる傾向が強く、自己の意見であることを隠し、一般論として意見を述べる傾向が見られた。研究3では、思いやり目標の高い人ほど、実際の行動として異論を表明し、自己イメージ目標の低い人ほど、異論の表明を控える傾向が見られた。研究4では対人目標と異論の表明の関係が日本特有の現象ではなく、アメリカ人でも同様の結果が得られることを確認した。具体的には、日米両国において、思いやり目標の高い人ほど異論の表明は集団にとって有益であると感じ、より頻繁に、また、自分の意見として、よりはっきりと責任を持って異論を表明することがわかった。一方、自己イメージ目標については、日米両国において、他者に有能であることを印象づけたいと思う傾向のある人ほど、より頻繁に異論を表明するのに対し、他者に「いい人」であることを印象づけたいと思う傾向のある人や、他者に悪い印象を与えたくないと思う傾向のある人ほど、異論の表明の頻度が少ないことが明らかになった。ただし、有能な自己イメージを与えたい人や、他者に悪い印象を与えたくない人は、一般論として意見を述べる傾向が見られた。最後に研究5では、思いやり目標をもつ学生ほど、異論の表明は他の大学生のためになると考える傾向が強く、実際の行動として異論をはっきりと表明することがわかった。これに対し、自己の有能さや、「いい人」であることを印象づけたい人ほど、異論の表明は自己のためになると考える傾向が強いものの、実際の表明行動を有意に予測せず、また、一般論として意見を述べる傾向も見られた。これら日米の結果を統合すると、(1) 思いやり目標の強い人ほど、異論や批判は他者のためになると考えるため、異論をはっきりと個人の意見として表明すること、(2) 自己イメージ目標の強い人は、異論の表明は自己のためになると考えるものの、それは異論の表明を助長するものではなく、異論を表明するときも一般論として意見を述べる傾向があることが明らかになった。

(4) 批判や異論の表明を行うには、それが自分のためにも他者のためにもなるという非ゼロサム的な考え方をし、ストレスを抑制する必要があることから、思いやり目標とこれらの変数の相関を調べた。その結果、思いやり目標の高い人ほど時間を非ゼロサム的に捉える傾向があり、そのような傾向の強い人ほど心理的欲求が充足され、主観的幸福感も高く、ストレスが抑制されることが明らかになった。逆に、自己イメージ目標の高い人ほど時間をゼロサム的な資源として捉える傾向があり、特に他者の時間を奪っていると感じる人ほど心理的欲求が充足されにくく、主観的幸福感が低く、ストレスが高くなることが明らかになった。これらの傾向は、客観的な忙しさの影響を統制してもなお見られた。思いやり目標をもつ人は、他者のための行動を取ることで、自己が何かを失っているというゼロサム的な思考ではなく、他者のための行動は自己のためでもあるという非ゼロサム的な思考をもつために、自己の心理的な欲求を充足させ、ストレスを感じることなく、他者のための行動がとれることを示唆する結果である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

Niiya, Y. (2018). My time, your time, or our time? Time perception and its associations with interpersonal goals and life outcomes. *Journal of Happiness Studies*,
<https://doi.org/10.1007/s10902-018-0007-y>

新谷優 (2018). 思いやり目標と自己イメージ目標の実験操作方法の検討. *The Hosei Journal of Global and Interdisciplinary Studies*, 4, 31-45.

新谷優 (2016). 改良版思いやり目標と自己イメージ目標尺度の開発. *心理学研究*, 87(5), 513-523.

〔学会発表〕(計5件)

Niiya, Y. (2018). A compassionate devil's advocate and a selfish conformist: When do the Japanese go against the stream? Poster presented at the 19th annual conference of the Society for Personality and Social Psychology, Atlanta, GA.

Niiya, Y. (2017). My time, your time, or our time? How interpersonal goals shape one's well-being by shaping how one views time. Poster presented at the 18th annual conference of the Society for Personality and Social Psychology, San Antonio, TX.

新谷優 (2016). 時間は誰のものか：時間に対する考え方と対人目標の関係. 日本社会心理学会第57回大会、関西学院大学.

Niiya, Y. (2016). Wanting to be kind vs. wanting to appear kind: Self-image and compassionate goals in Japan. Poster presented at the 17th annual conference of the Society for Personality and Social Psychology, San Diego, CA.

新谷優 (2015). 日本語版思いやり目標と自己イメージ目標尺度の因子構造. 日本グループ・ダイナミックス学会第62回大会、奈良大学.

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究分担者

(2)研究協力者

研究協力者氏名：ジェニファー・クロッカー，タオ・ジャン，シャミール・ヤキン

ローマ字氏名：Jennifer Crocker, Tao Jiang, Syamil Yakin

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。